

## 人間分子の挙動 2 一個性

“平均的な人間は誰もいない (トッド・ローズ) [1]”

流体中の夥しい数の分子は、同じクローンではなく、個性をもっています。ある一定の温度の流体は、マクロ的には一様あるいは均一であります。その流体中に存在する分子の動き回る速度は、分子によって異なりますので、ミクロ的には全く一様ではありません。一様ではありませんが、それぞれの速度を持つ分子の存在確率は、出鱈目ではなく、この速度範囲の分子の割合は全体の何%を占めるということが、流体力学の理論 (ボルツマン分布) に従って理論的に決まっております。マクロとの整合性がちゃんと取れているのです (図 1 3)。同じことが人間分子の個性についても言えます。例えば、身長は個々人によって異なりますが、ある身長範囲の人が全体に占める存在確率は、良く知られた統計 (正規分布) に従います。統計は、夥しい分子からなる流体全体のマクロ的な性質 (平均やばらつきなど) の情報を与えてくれますが、それぞれの分子の個人情報については何も教えてくれません。個性やそれに関連した差別の話になると、このマクロとミクロの概念が議論の中で混在し、誤解や対立を生みやすいようです。「男性は、女性よりも力が強い」。これは、マクロ的・統計的には正しいですが、ミクロ的には正しいとは限りません。今昔物語に出てくる怪力嬢のように、分布の極端に位置する個人も、統計的性質と矛盾することなく存在するからです。さて、人間分子の場合は、身長以外にも様々な指標によって個性を議論できます。その指標は、肉体的にも、精神的にも多様であり、ほとんど無限と言ってもよいでしょう。それらの多様な指標の組み合わせで個性を論じるとすれば、人間は一人として同じ多次元的指標の組み合わせを持った人はいないわけですから、存在自体が個性であると言えます。ハーバードの個性学入門で、平均的な人など存在しないという、以下のような興味深い事例が紹介されています<sup>[1]</sup>。膨大な女性の体型データを基に著名な産婦人科医が考案したノーマという名前の彫刻があります。ノーマの彫刻は、女性の理想的体型と考えられてきました。4000 名近い参加者の中から、ノーマの体型に近い理想的な体型の女性を選ぶコンテストが行われました。驚くべきことに、審査の対象となった体の 9 つの部位の全てについて平均値の範囲内に収まる女性は一人もいなかったとのこと。5 つの部位に限定しても平均値の範囲内に収まる人は 40 名に満たなかったそうです。この事例のように、女性の体型に関する狭い多次元指標だけでも、全ての平均値を満たす人はいません。ましてや、人間全般に関する膨大な多次元指標において、全てが平均値であることはあり得ないし、また、全てが極値であることもあり得ないのです。我々は、ある指標においては平均値に近く、別の指標は極値に近い、といったように、多様な指標の組み合わせで個性を成り立たせているのです。

一卵性双生児は、遺伝子的には同一であるからクローンと思われるかもしれませんが、ところが、遺伝子が全く同じであっても、全ての遺伝子が発現するわけではなく、どの遺伝子が発現するかは、後天的な影響、すなわち環境などに依存することが知られており、エピジェネティックと呼ばれています。一卵性双生児の子供は、全く同じ遺伝子を持つが、身体的特徴の 1 つである指紋は異なっています。これは、母親の胎内にいるときの位置など、わずかな環境の違いで、すでに

異なる細胞分化が起こった結果ではないかと考えられています。これと同様に、後天的に眠っている遺伝子を発現させることが、理屈上可能です。一卵性双生児を長期間追跡した研究成果によれば、諸説あるものの、遺伝半分、環境半分、個性に影響している、と言ったところでしょうか。

持って生まれた個性を、後天的に変更することは可能であるにしろ、それは容易なことではないでしょう。まずは、多次元的な指標によって、先天的に自分に与えられた個性を客観的に把握した上で、他の人間分子に対して固有性を有すると思われる部分を積極的に利用していくべきでしょう。あるおデブ芸人は、劣等感に傾きがちな身体的極値を逆手にとって、固有性として自己プロデュースしています。高身長であることを気にして、踵の低い靴を履き、背を曲げ、小さく丸まっていたメガネの女性事務員は、失恋をきっかけに開き直り、高いヒールを履いて、背筋を伸ばし、メガネをコンタクトに変えて、ファッションモデルにスカウトされました。あるルックスの冴えない東大出身の塾講師は、大学時代全くモテませんでした。自分の最大の売りである知性に惹かれる女子大生も少数ながらいることに気づき、合コンの会話でそのような女性を探り、ターゲットを絞ることによって彼女をゲットすることに成功したそうです。自分をプロデュースしてくれるのは、自分自身だけです。個性に関する多様な指標の全てを底上げする必要はありません。人生の時間は限られているので、自分の弱み（マイナスの極値）はあえて放置し、強み（プラスの極値）として利用できそうな個性を伸ばしていけばよいのです。あるいは、極値は平均値から外れているという点で、個性を象徴するものであり、同じカードの裏表のように、マイナス（闇）であり、プラス（光）でもあります。個性は、2面性を持っていると考えられるのです。実際、多くの動物を特徴づけている個性が、大いなる長所であると同時に、大いなる欠点であることを第1章で見てきました。おデブ芸人や、高身長のモデルのように、大いなる欠点を転ずれば、大いなる長所として機能するということもあるでしょう。

そのような個性を生かす、自己プロデュースは、どのようにすれば可能でしょうか。自分という人間分子にマーカーをつけて、他の人間分子と区別し、碁盤の上に並べた碁石全体を俯瞰する中で、自己の独自の歩みを演出していけばよいのですが、それにも台本が必要です。自分の周囲にモデルとなるような人が実際にいれば幸せです。が、そうとは限りません。社会的遺伝子（ミーム）を利用して、映画・小説・演劇などから、仮想的な人生を生きてみて、その中から適したモデルを探し出すことも有効でしょう。我々はおかしなもので、自身に全く欠いている個性をもっているヒーローに魅了されがちです。無いものねだりの補償行為です。音楽の才能が全くないものが、ミュージシャンへの憧れだけで、人生をかけるとしたら、大変危険な博奕となります。自己プロデュースに適したロールモデルは、自分自身の個性や境遇と類似性を持っていることが望ましいでしょう。そのような意味で、両親、兄弟、祖父母など、近しい血縁は、自分自身を客観的に知るうえで、極めて重要な情報源です。あまりにも、灯台下暗しであるため、強調されませんが、血縁の人々に、人生の記憶に関する様々な事柄をヒアリングして、彼らの思考・行動の一般的傾向を引き出すことはかなり有益に思われます。それらの傾向の多くは、遺伝子の類似性から推察しても、あなた自身の中にも内在している可能性が極めて高いからです。そこから、直接参考になるプラスの個性、反面教師として戒めなければならないマイナスの個性など、あなただけにカスタマイズされた重要な人生教本が得られる可能性が高いでしょう。

参考文献

[1] トッド・ローズ、小坂絵里訳、ハーバードの個性学入門、早川書房

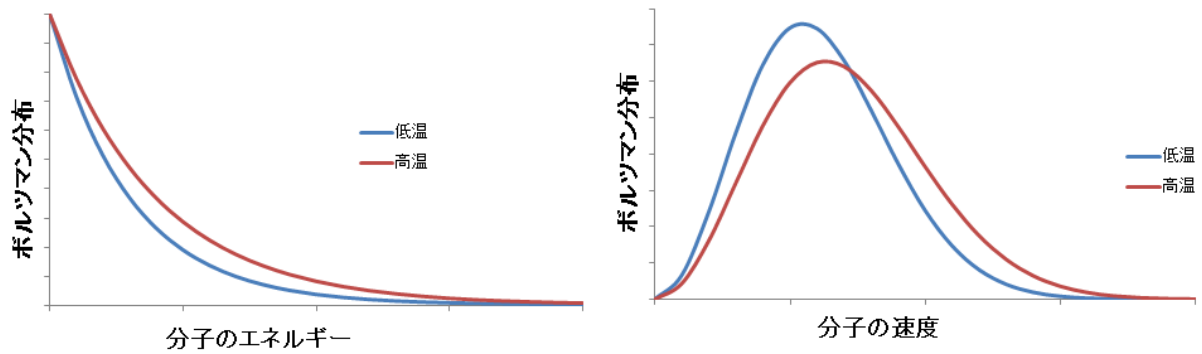


図13 分子の挙動とボルツマン分布

左図:分子が取り得るエネルギー状態(横軸)の確率(縦軸)

ウェアラブルセンサーにより人間の活動量も同じ分布に従うことが知られている(矢野)

右図:理想気体中において、その速度(横軸)で動く分子が存在する割合(縦軸)

温度が高いとエネルギーレベルが全体的にあがり、早く動く分子が増える